

才的政治家であった。

彼は無慈悲に自分の意向を貫くこともあったが、他方、説得と妥協の術を何よりも重視した。妥協は、内部に対立を抱える国にとって、統一を守る鍵であった。彼の絶えざる妥協が批判的になったとき、彼はこう説得した。

「我々の存在自体が変則なのだ。我々は英国臣民であると同時に、自治国でもある。カナダは多州に分かれ、多民族に分かれている。こうした国で船を安全に進めるには、純粹理想主義の政策よりも、むしろ国のあらゆるセクションに訴える政策の方がいい。」

### 経済的飛躍の時代

ローリエは、幸運に恵まれていた。長い不況もようやく終わりを告げ、世界経済は再び活気を取り戻しつつあった。米国のフロンティアが開拓しつくされ、大勢の移民がカナダ西部へ殺到した。オンタリオ州やケベック州の北部に、あるいはBC州の山岳地帯に、鉱山や精錬所や木材切り出しキャンプや、紙パルプ工場の町が次々と作られていった。州は、町や工場に電力を供給し、カナダは急速に工業国となりつつあった。カナダの産業は保護関税に守られて成長し、また、一次大戦前の十数年間に二倍にふくれ上ったカナダ市場を狙って、米國資本が次々と工場をカナダに設立した。人びとは樂觀的になり、大陸横断鉄道も二本に増えた。ローリエは、「二十世紀はカナダの

世紀」と豪語した。

しかし、物質的な繁栄だけで国の統一が保てるわけではない。マニトバ学校問題がローリエの妥協策で何とか收拾されたのもつかの間、対英関係をめぐって、また新たな問題が起こった。

当時のイギリスは、キプリングの詩に見られるように大英帝国の繁栄を謳歌し、帝国主義の意気盛んな時代であった。ジョセフ・チェンバレンは、英国と植民地の結合を強化して帝国連合（共通の貿易規制や統一軍事計画を可能にする連合）を作ろうとしていた。イギリス系カナダ人は、英国のこの帝国フィーバーに共感を寄せ、一方、フランス系カナダ人は反感を抱いていた。

### 完全な独立国めざして

ローリエは、イギリスの諸制度を讃美し、英帝国の偉大さを口にしたが、実際は心底カナダ人であり、ナショナルリストであった。英国の指揮下に植民地政府の代表が一堂に会する英帝国会議で、彼はいつも巧みな議論でカナダの利益を主張したが、言葉以上に行動でもイギリスの押しつけを拒んだ。将来の完全独立を不可能にする帝国連合よりは、現在の自治領の地位の方を選んだのである。なぜなら、帝国連合内部での対等性、平等性など、彼には信じられなかったからだ。

一八九九年、南アフリカに起こったボア戦争は、ローリエに対する仏系カナダ人の不信感を顕在化させた。英系カナ

ダ人は、カナダが派兵してイギリス軍を支援すべきだと主張し、仏系カナダ人はこぞってこれに反対した。ローリエは結局、部隊を派遣しはするが、志願兵に限る、という妥協策を講じた。仏系はこの方策を大いに不満とし、ローリエの妥協主義は、常に仏系カナダ人に犠牲を強いるものだ——という感情が仏系の人々の間に流れた。

第一次世界大戦は、英仏系の亀裂をさ



ボア戦争へのカナダの参加は、英仏系間の対立を一層深めた。カナダの派兵を主張する英系紙モントリオール・スター（1899年10月7日付）は、平和時（女王在位50周年—左）と戦時（右）のローリエを並べて、ボア戦争に消極的な首相を皮肉った。

らに深めた。ドイツの海軍増強に脅威を感じた英本國政府は、植民地に対し、戦艦建造費の一部負担を要求してきた。ローリエはそれを断り、代わりにカナダ海軍の創設を提案、英国が有事の際に派遣すればよいとして、海軍法案を上程した。保守党はローリエを（英帝国への）反逆者と呼び、フランス系のボアラサはボアラサで、イギリスのために戦う「おもちやの海軍」は無意味である、ローリエたのむに足らず、と非難した。

海軍問題で議論が沸いていたちょうどその頃、ローリエは対米貿易政策でも大きな転換を図ろうとしている。当時、好況とはいえず、その恩恵は国民各層に等しく及んだわけではなかった。農民や一次産業従事者は高い工業製品を買われ、またアメリカ市場への産品輸出も不利だったため、保護関税に不満を抱いていた。一九一〇年、これまでカナダの互惠要求を一切退けてきたアメリカ側から、初めて互惠協定の申し入れがあった。ローリエはこれを推進しようとしたが、銀行家、製造業者、小売業者、鉄道業者が猛然と反対し、保守党がこれに唱和した。互惠主義はカナダへの反逆であり、ローリエはヤンキー製品を買うために国の独立を売り渡そうとする売国奴だ——というのである。

ローリエは、総選挙で国民の賛否を問うた。こうして行なわれた一九一一年の選挙で、彼は完敗を喫し、政権は保守党のボーデンに渡る。選挙をふりかえって彼は述懐している。「私はケベックのフランス系とオンタリオのイギリス系の両方から裏切り者と思われている。ケベックでは国家主義者、帝国主義者といわれ、オンタリオでは（英国からの）分離主義者、反帝国主義者と非難されている。だが実際はどっちでもないのだ。私はカナダ人以外の何者でもない。」

ローリエは、野党となった自由党を率いて一九一七年に再び政権に挑戦するが、またも敗退。一九一九年二月、党首のまま七十七年間の生涯を閉じた。